

砲兵団長 今村方策大佐（兼務）

山西野戦軍第十總隊（第二次）

總司令 今村方策大佐、副司令 岩田清一少佐

參謀長 相樂圭二大尉、政治部 城野 宏

第一團長 小田切正男、第二團長 菊池修一大尉

第三團長 住岡儀一大尉、第四團長 古屋敦雄大

尉（後に増田直年大尉）、第五團長 欠

第六團長 布川直年少佐

太原会戦・閩軍戦闘序列（太原・綏靖公署）

主任 閩錫山、副主任 孫楚

第十兵团（第十九・第三三・第四三軍）、第十五

兵团（第三四・第六一軍）、由孫副主任指揮

（五個師団・三個縱隊他）

太原会戦 共産軍戦闘序列

總指揮 徐向前

城北区指揮部 彭招輝（三個旅団、五個支隊）

城南区指揮部 姚喆（二個縱隊、二個軍区）

城東区指揮部 楊徳志（一個縱隊、一軍区、四個

支隊、三獨立支隊）

城西区指揮部 楊成武（二個縱隊、一軍区）

總予備隊周士第（二個縱隊、砲兵一旅団）

しかし、第一軍と閩錫山との折衝であったが、結局、昭和二十一年二月末、太原方面では軍人二万三千人、居留民三千人、一方大同地区では軍人二千人、居留民二千人、合計三万人の残留者が確定した。しかし、三月から残留者以外の帰国が始まると、特務団編制となり総数軍民一万六千人となる。

お国のために戦った三年間

山口県 井上 勝 清

昭和十八年六月夕方、アツツ島玉砕のニュースを聞いていっていると電報が届き、六月十三日西部第四部隊入隊

の通知（召集令状）。

この年は長雨で麦刈りができず、穂から芽がでる。

六月十三日、営門をくぐると下士官が大声で、

「初年兵は五列に並べ、ここは軍隊だ。何をグズグズしているか！」私は三列目に並ぶと、その中から丈夫そうなのを前にだして六列を作る。私は背が高かったので前に出されたが瘦せていたので三列目に戻る

（第一回目の運命の別れ目）。

七月三日雨、明日の出陣に備え午前中は身辺の整理、

午後は班内休養、初年兵も雑談にふけていると、ボンボンボンボンと空砲の音がする。聞けば南方から御英霊のお帰りという。御英霊のお帰りの時には必ず雨が降る。これを涙雨と真江木古年兵殿が教えてくれる。三中隊員からいずれ何人かが白木の箱に錦着てこの屯営に帰ってくるであろうが、その時も必ず、しとしとと雨が静かに迎えてくれるであろう。その中の一柱が私かも、と自己嫌悪に落ち入りながらウトウトしている、二中隊の奥田兵長殿より呼び出しがあり、徒手帯剣で裏門から外出する。

練兵場のはずれの農家で父母に会う。明日の出陣を知り見送りに来たという。これが生前の別れかと思うと、先程の涙雨と白木の箱が脳裏を交錯する。

中支派遣第十三軍

第六十四師団 師団長 中将 船引正之

第七十旅団 旅団長 少将 岡村勝美

第一三三大隊 大隊長 大佐 白浜藤三

第三中隊 中隊長 中尉 重村隊へ編入

（開一三三〇重村隊）

七月四日 晴天。午前一時起床、朝食を済ませ背囊を背に命令を待つ。外は真つ暗な中で出陣式を済ませ、暗闇の中を営門を出ると、道の両側に大勢の見送りがいる様子。私は左手を振りながら右手に銃を担い、四列縦隊の左側を行進する。

野田神社を過ぎるころ、母に出会う。瞬間的に母は左腕にしがみつくも隊の行進の歩調と母の歩幅が合わないで腕組みしながら母を引きずる。古兵殿に対する気兼ねで手を離してくれといひ、母も何か喋っているようだが、見送りのざわめきと軍靴の音に消されて

聞き取れない。母の温もりを感じながら五十メートルばかり引きずる。山口駅に着いた頃には夜も明けて、七月の朝日がまぶしい。

朝鮮・満州・北支を貨車に揺られて、七月十三日江蘇省金壇に着く。早朝、丹陽を行軍で出発。途中の炎天で顎を出し、疲労困憊しているのに歩哨に出される。月夜で時計の針が見えるが一時間の長いこと、立哨、仮眠、控えと三時間単位で繰り返されるが、眠れないので頭はポーツとする。

十一月二十五日、第六十四師団通信隊へ無線を習いに行く。第二回目の運命の別れ目である。途中、鎮江から揚子江を渡りクリークをボンボン船に乗って揚州に着く。寸前、薄暗くなつたとき、夕食をとつたが隣にいた兵隊が「ああ、満腹だ」と両手を上げ「いつ死んでもいい」といいながら通路に降りた瞬間、滑ってクリークに落ちた。第五十四か五十三大隊の兵隊とのこと、運命とはかくあるものか、かわいそうの一語につきる。

揚州には、三月二十五日までいたが（教官・高田少

尉）、城外の五停橋等の教育は楽しかった。師団通信隊長は四国の人で香西大尉。

鎮江の第七十旅団通信隊で補習教育を受け、五月十四日無線通信手として一号作戦に参加。鎮江より馬に乗せた貨車で南京經由、揚子江を渡り徐州、開封、鄭州を経て新鄭で下車。さらに漢口を目指して出発、途中発熱、心臓脚気にて入院する。退院後は鎮江の留守部隊へ復帰する。この年は猛暑で寝ていても汗が耳に入り、水上で寝たような気持ちがあった。

昭和十九年八月二十五日、鎮江出発、馬を船に乗せ揚子江を遡上し、石灰窯ようで下船、人馬共に武昌まで行軍、十月一日、武昌着、玄武寧で梱包監視をしながら、毎日命令受領で町にでるのが楽しみでした。

三月五日、雪の降る中、武昌駅を出発、岳陽で軽便鉄道に乗り換え、塩を積んで長沙へ行く。途中P51の空襲を受けガソリンのドラム缶が爆発して塩は黒焦げ。岳麓の旅団通信隊で三月二十日まで勤務し、独立混成第八十七旅団独立歩兵第五一八大隊（震動部隊）通信

隊へ転属。

雪の中長沙ちゅうさを出発。制空権はすでにアメリカにあり、夜行軍しかできない。五十分歩いて十分の休憩をするが、休憩と同時に背囊を枕にグツスリと眠る。出発準備の声を夢うつつに聞いて歩き出す。歩き出して十分ばかり頭が割れるように痛い、それと同時に歩きながら眠って前の人の鉄帽に頭をぶっつけて目が覚める。湘潭しやうたん、衡山こうざん、衡陽こうやうを経て、四月十七日柳県に着く。

この辺は山が沢山あり、松の木が茂り生水をのんでも大丈夫、「まるで故郷にそっくりだ」と歌ができていた。部隊長は松高大尉（島根県浜田市）で、訓示は「お前たちの命は私にくれ、お前たちの戦友（戦死者の遺骨）は大東亜戦争に勝たないと帰られんのだ」と。この訓示を聞きながらも、こんな所で死ぬるかと思が身に言い聞かせる。（大隊通信隊長・藤本中尉）

第三回目の運命の別れ目か、人事係の川田曹長殿から漢口の通信教育隊へ通信工手専習員として分遣を命ぜられる。

四月二十日、柳県を出発、民船にて湘江・洞庭湖を下り岳州から汽車で武昌に着き、漢口の通信教育隊（第一中学の校舎）で八月十五日の終戦を迎える。

負けたのに心中、喜びを隠し切れなかった。なぜなら、初年兵も七年兵も全員が日本へ復員できるから。

漢口の市内に出て単独宿舎に行く途中、市民は支那が勝ったことを知り、戦勝ムードが漂う。やがて腰に鈴を着けて号外、号外と町の隅々に「日本天皇米英支蘇順」と朱で書いた紙切れを貼る。これを見た市民は飛び上がって喜ぶ。支那人は喜怒哀楽を身をもって表わす。中の一人は私に近寄り「シーサン、プシンデー」と同情の言葉をくれる。

九月の初め漢水の陸軍病院の警備に行く。近くに飛行場があり、連日、米輸送機から蒋介石直系の軍隊が漢口の町へ駐屯する。

九月中旬、再び漢口に帰り、武装解除される。日本は本当に負けたのだと自覚する。弱兵部隊（隊長・岩崎中尉）百人が揚子江を船で下り揚子ようすに上陸した。

九月二十六日、教育隊にいた数名が揚子に行き合隊。

中国は二食で、捕虜である我々も二食、一食分掛盆一杯のお粥で、四十歳前後の召集兵は栄養失調で痩せていく。

十一月二十日、揚子から漢口に行き、揚子江に浮かぶ鉄製の舢舨の中で寝る。鉄板一枚下は水、チヨロチヨロと水の流れる音を耳にすると鎮江の夏を想い出す。武昌に渡り武漢大学の黄色い屋根を左に見ながら一路、黄岡へ。行軍途中、支那の子どもに眼鏡や腕時計を掠奪される。

黄岡に着いたのが十一月二十八日、分隊再編して、点々とした農家の土間に藁を敷き、その上に筵を敷いて寝たが、体温で藁の下が暖まるまで寝付けぬ。また床が暖かくなると虱が活動し始めて痒いがかゆいのか眠る。

夢の中で美味しい饅頭を腹いっぱい食べたところで目が覚める。捕虜になっても別に仕事はなく、朝暗い内に朝食をとり（空腹で夜が明けるときまで寝ておれぬ）、元氣な兵隊は農家の手伝いをして昼食とタバコを貰う。夕食は四時ごろで昼食なし。分隊は三島伍長以下九名

で教育隊にいたのは三島伍長と私の二人で外は弱兵部隊。本部（部隊長中村雁次郎大尉）まで三キロあるが毎日命令受領に行く外は暇なので戦友との話は空腹を忘れたのか、話題はいつも食べ物で、どのぜんざいがうまかったとか、うまかった話で日が明け暮れていく。そのうち年をとった兵隊は栄養失調になり、体力が衰えるから、虱の媒介で発疹チフスにかかり、妻子をもつ一等兵殿が次々と病死する。揚子の宿舎で同じ分隊にいた、前田、牛島の両人も亡くなった。

死を予言するのか二、三日前に死相が出る。息を引き取る時に「おかーちゃん」と虫の声で一言叫ぶ。肉親への別れの言葉である。独身の私（二十四歳）は、はじめの内は最愛なる妻への別れの言葉と理解していたが、大きな間違いで、女房、子供をもつ四十男の最後の一言は自分を産んでくれた実母への別れの挨拶が「おかーちゃん」であることを知る。

戦後五十年、その間父母を亡くし、孫をもつ身となつて母子のつながりがいかに深く尊いものであるかを

知るとともに、母に何もしてやれなかったことを悔いている私である。

最後に戦死、戦病死された戦友のご冥福と遺家族の方々のご繁栄をお祈りしております。

(参考)

早足の歩幅は七十五センチ、一分間に百十四歩
運命の別れ目

その一、一列は歩兵砲と重機関銃中隊要員。

その二、中隊にいたら戦死したかも。

その三、蒋介石直系の兵隊は強く、進軍ラッパを吹いて夜襲してくる。通信隊員も数名戦死する。

私の追録 入隊より復員まで

岐阜県 小池 隆 重

昭和十八年十二月四日、早朝、丸小根神社にて武運長久の祈願、小池隆重、杉山竹男と二人、北恵那鉄道

苗木駅より入営のため出発。

七人、小池隆重、小池光男、大山久、桜木健三、早川清、林正美、杉山竹男。挨拶代表小池隆重。

同年十二月五日、中部第四部隊（第六十八連隊）へ六名、中部十三部隊へ一名（杉山）。

—昭和十八年十二月五日—

中部第四部隊七中隊入隊。

同年十二月中旬、原隊出発、下関より関釜連絡船にて釜山へ。その夜は釜山公会堂にて仮眠。次の日汽車にて朝鮮を縦断して、満州を経て北支へ。新浦線にて、南京の対岸の浦口へ（この日は十二月二十七日ごろと思う）。

輸送船を待たが来ない。二隻の輸送船に六連隊、輜重、野砲その他を乗せて出発して行つた。

同年十二月二十七日、船が来ない、寒い、先に乗った者が羨ましい。南京の兵站にて仮眠する。

同年十二月二十八日、南京の港まで行くも兵站まで引き返す（十二月二十八、二十九日ごろ安慶と九江との間で三師団の十八年兵が乗った輸送船が爆沈されたとの噂が広まった）。